

一閃の光

本多秋五



筑摩書房

一閃の光

本多秋五

筑摩書房

一閃の光

一九九三年八月二五日 第一刷発行

著者 本多秋五

装画 中川一政

発行者 森本政彦

印刷 厚徳社

製本 矢嶋製本

発行所 筑摩書房

東京都台東区蔵前二ノ六ノ四
振替 東京六一四 一三三

ご注文・お問い合わせ、乱丁・落丁本の交換は左記宛へ。
〒三一大宮市櫛引町二六四 筑摩書房サービスセンター
TEL 048-651-0055

一閃の光 目次

1 一閃の光

一閃の光 九

衆生の恩 一四

残年の計 一九

年頭断想 二四

聖者待望 二九

釣瓶おとし 三四

走らぬ頭 三九

激流の音が聞こえる 四四

2 中川一政

らくらくと吐く名言 四九

中川一政邸訪問記 五三

米寿記念会での挨拶 六〇

中川一政氏の「箱根駒ヶ岳」 六五

中川一政さんのこと 六九

3 中野重治

老樹 七五

中野重治氏の風雪五十年 八三

中野重治断想 九二

回想点々記 九七

寒中素足の人 一〇七

昔、中国四十日の旅 一一二

中野重治における歳のとおり方 一二三

4 尾崎一雄

極道息子と賢者 一三三

随処に主となる人 一三九

尾崎さんの繰返し 一四四

尾崎さんの人と小説 一五〇

暗い夜 一五二

5 藤枝静男

八高時代の藤枝静男 一六二

藤枝静男のこと 一六四

昭和六年前後の藤枝静男 一六六

藤枝静男の近況瞥見 一七三

6 平野謙

八高時代の平野謙 一七九

若い日の平野謙 一八四

片身の魚 二九二

癌研入院の前後 二九四

くも膜下出血まで 二〇四

亡友平野謙のこと 二〇九

平野謙を偲ぶ 二二七

平野謙についての断片 二二三

藝術院恩賜賞のこと 二二六

たて軸とふくらみ 二二二

7 荒正人

鹿を逐う人 二二九

「荒正人著作集」第一巻の解説 二二四

8 ボケへの恐怖

近況 二二九

墓と墓石 二九二

失敗談 二九六

ポケへの恐怖 二九九

あとがき 三〇九

1

一閃の光

一閃の光

透谷の『内部生命論』を読んで、「宇宙の精神即ち神」と「人間の精神即ち内部の生命」とが「感応」するときインスピレーションが生れる、という言葉に出くわして、ある感銘を受けた。

大なり小なり誰にもあることだろうが、私にもそれに似た経験があつたからである。

「神」を本当には知らない私は、「宇宙の精神即ち神」という、その「神」を「宇宙の理法」と読んだ。今から四半世紀以上も前のことである。

この言葉は、一年に一度か、二年に一度くらいの割りで思い出すにすぎなかつたが、近年はかなり頻繁に思い出すようになった。

深い井戸や洞窟に入ると、昼間の星を見ることがあるといわれる。そのように、意識の暗い奥底に沈潜すると、思いがけなく一閃の光がひらめいて、宇宙の理法を感得した気とする

ときがある。いや、沈潜するもしないもない、不意に一閃の光がひらめいて意識の底を照らし、一種悠久の感に打たれるのである。それを私は、現世光線の眩惑が消えた瞬間と考えるようになった。

数年前、NHKのウルトラ・アイの時間に、丁度金星が地球に接近して、東北地方のどこかの上空を通過するという時期のことであったが、山川アウンサーが岩手県かどこかを車で走りまわって、現在使用されていない高い煙突を見つけ、その煙突の基底部に視力優秀な人を数人入れて、果して昼間の星が見えるかどうかの実験を試みたことがあった。結果は、見えない、と出た。

私は、まったくの独り考えだが、この実験を信用していない。煙突は固定している。その筒先がとらえる視野は大空の一点にすぎない。どこの煙突でもいいなどという道理のあるはずがない。筒先がとらえている視野のなかをうまい具合に金星が通過する、そんな煙突があったとすればよほどの偶然で、そんな煙突はまず絶無といってよからう。

宇宙との感応は、宇宙との一体感といってもいい。自然との一体感といってもいい。それは不意に一閃の光としてやって来るので、不随意的なものである。これをいくらかでも意識的に、随意的に呼び寄せる工夫はないものかと考えているとき、鈴木大拙の一句に眼がとまった。

「(宗教) 体験とはこの心、すなわちわれわれの主観が、一定不変のある態度を持して、内

外の境界に対して行く、その呼吸が自分の手にはいる、ということである。」（「禪とは何か」）
 「一定不変のある態度」は、私にとって当の目的物で、はるか彼方にあつて手のとどかないものだが、それを「手に入れる」「呼吸」——原文とは言葉が前後するが、私は勝手にこう置き換えた——という言葉が気に入ったのである。

新宿で「近代文学」グループの忘年会があつた帰り、東京駅で中央線を降りて、横須賀線に乗換えるため、最初の階段を下りて、広い地下一階へ出た。

この日は朝飯を食つてすぐ上京し、二つ三つ用事をすませて、忘年会で三時間半ほど駄弁つて、おまけに本の入った紙の手提げ袋を両手に持つて、かなり疲れて、頭はボンヤリしていた。

あれは地下四階へ一直線に降りるのか、長く深いエスカレーターがある。それに足を乗せた瞬間、ある観念が閃めいた。自我は宇宙法則の受信機だ、という観念である。（受信機というを受け身一方のようだが、発信機内蔵の受信機だ、とあとから考えた。）地上に自分が生きている。宇宙には宇宙法則が遍満している。それがまっすぐ自分にとどかないのは、厚いスモッグの層がすっぽり地上を覆っているからだ、そのスモッグが宇宙法則を屈折させ、拡散させてしまうのだ、と思つた。

その凶形がはつきり眼の前に浮かんだ。スモッグは歴史だ、因果の錯綜だ、智恵分別の境界だ、と思つた。

いつも宇宙法則を自由に受信できるためにはどうすればいいか？ スモッグの上へ、受信機をもち出せばいいのだ。大拙のいう「呼吸」を「手に入れる」ことはそんなに困難ではなさそうだ、と思った。

急に手足が自由になり、腰の据わりが確つかりした気がした。

電車のなかでは大抵眠ってしまふ私が、帰りの電車では眠らず、眼が冴えていた。

ひと晩ねて翌日、昨夜のことを考えてみた。自分という存在は、スモッグのなかで日夜呼吸している。頭为天辺から足の爪先まで、すべての細胞がスモッグを呼吸して、スモッグに染められているにちがいない。

自我の受信機をスモッグの上にまで浮上させる作業は、進行の矢印は逆のようだけれども、意識の深層へ灯火を降ろして、スモッグに影響されていない生のままの層に達する作業と連動していなければならぬはずだ。いや、それが一本の棒になっていなくてはスツパリしない。現在の自分はそこまでは到っていない。「呼吸」を「手に入れる」ことは、昨夜、半醒半睡の間に考えたほど容易ではないらしい、と思った。

しかし、今も依然としてあの図形——われわれの頭上をすっぽり覆っているスモッグ、その上に浮かんだ自我の受信機という図形——は私の気に入っている。それを思い浮かべると、何となく肩の荷が軽くなった気がする。

この話を友人にすると、友人はじつと聴いていたが、「宇宙法則の感得を邪魔するものが、《現世光線の眩惑》から《スモッグ》に変わっただけでもあるようだな。しかし、それでも凶象ビルトが単純になっただけマシだよ。それだけ君の意識のなかのスモッグが浄化されたのだよ。」といった。

友人は、私が気落ちしていると思って、慰めてくれたのかも知れない。私は気落ちしているわけではない。渋みの残る柿を食う気がないだけである。柿はいつか甘くなるだろう、と楽しみにしているのである。〈八二・一二・三〇〉

〔群像〕八三・三

衆生の恩

こんな題を書きつけると、昔から私をよく知っている人たち——古い友達や、兄弟とその連合いなどは、柄にもないこと、何をいい出す気かと思うだろう。私自身にしてからが、変れば変わるものだな、という気がしないでもない。

大学へ入ったころ、休暇で家へ帰ると、「僕は出来損いになりますよ」と、親爺に何度もいった。「どこの家でも、男の子が三人も四人もあると、一人位は出来損いができますよ」などといった。親爺はいつも黙っていて、返事をしなかった。

親不孝なことをいったものだ、親爺はどんな気持ちで聞いていただろうと思う。しかし、当時の私としては、そんなことをいわずにいられないものがあつたのも事実である。

当時としては、大学の文学部に入るということが、親にとっては不安なことであつた。おまけに赤にカブれて、一番熱心に勉強したのは左翼の革命思想だつたから、あだな期待をも